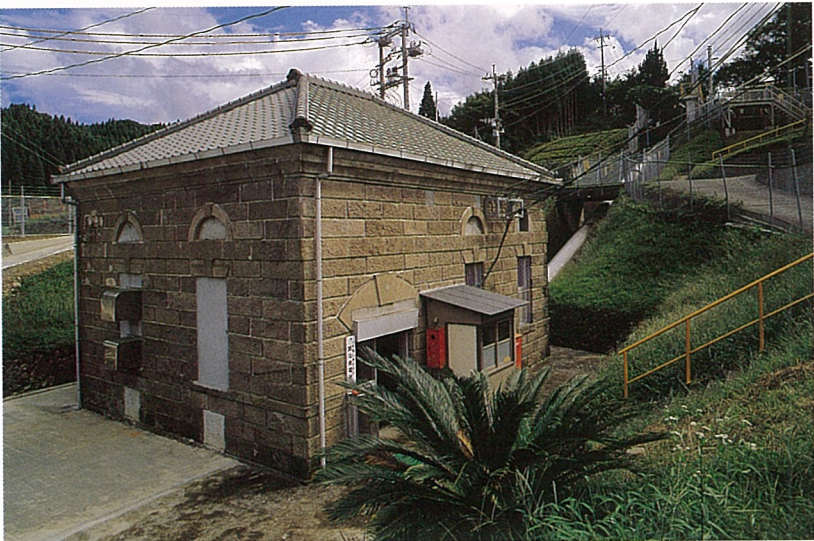


● 生きた科学博物館

JR日豊線の清武駅から西北へ、約十分ほど車を走らせると、清武川の南岸沿いに、石造りレトロ調の建物が見えてくる。一世紀にわたり、県民のライフラインを支えてきた「黒北発電所」である。そして今、「ふるさと再発見」に欠かせない、事はじめのスポットとして人気を呼んでいる。

宮崎県の電気事業は、一九〇七（明治四十）年に営業を開始した「日向水力電気株式会社」からスタートしている。「黒北発電所」は日向水力が手掛けた本県初の水力発電所である。現在の九州電力の前身でもある。

もっともそれまでに、北方町の横峰鉾山や日平鉾山などで、自家発電が行われているが、いずれも電力は鉾山用としてのみ使われ、一般の家庭にまでは供給されていない。従ってここが電力事業の出発点とされている。



黒北発電所。石造りレトロ調の建物は生きた科学博物館でもある

発電所入り口に建てられている「記功碑」には、地元の実業家として活躍していた大和田伝蔵（おおわた・でんぞう）と、柴岡晋（しばおか・すすむ）が、本県の産業を振興するために、何よりも電力が必要である。そのためには水資源に恵まれた地の利を生かした、水力発電所の建設がまず第一と賛同者を募り、資金と技術の導入に奔走し、ようやく一九〇六（明治三十九）年五月、日向水力を設立、翌年八月営業開始にこぎつけたと、詳しい経緯が記されている。

また当初は木花村の鏡洲（現宮崎市）が、候補地としてあげられていたが、地形や水量の関係から、現在地に変更されたとある。使用された発電機は出力二百ワットで、水車ともどもドイツ製。以来今日まで働き続けている。

点灯を開始した当時の利用者は千七百八十灯、これがわずか二カ月後に二千七百八十灯となり、

明るさと利便さによる人気で、利用者は日ごとに増えていく。使用された電球は八、十、十六、二十ワットの四種類。料金は十ワットで一カ月六十銭。米十^キが一円二十銭、はがき一枚が一銭五厘の物価と比べると高額であり、普及し始めた電話とともに、高根の花だったことがうかがえる。

こうして明治、大正、昭和、平成と休みなく働き続けてきた黒北発電所は国の登録有形文化財となり、暮らしの歩みや歴史を訪ねる「ふるさと再発見」の学習の場として、また子供たちのための「生きた科学博物館」として注目を集め、見学者も多い。

原田 解